日本初!〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

立教大学大学院　21世紀社会デザイン研究科

Social Designer

vol. 29

巻頭インタビュー

消費者教育の推進と社会デザイン ——もっと社会人に学びの場を

消費者の権利の保護や消費者問題の解決を目指すNPOと企業をつなぐ重要な役割を担う傍ら、消費者問題に関する分野の第一人者として本研究科アドバイザリーボードメンバーを務める阿南 久さんにお話しをうかがった。

【インタビュアー:萩原なつ子 研究科委員長・教授】

阿南 久（あなん ひさ）さん

長女出産を機に食品添加物などへの関心を高め、消費者運動に取り組む。生活協同組合コープとうきょう理事をはじめ、消費者庁長官など数々の役職を歴任。現在は雪印メグミルク㈱ 社外取締役、一般社団法人 消費者市民社会をつくる会 代表理事、(公財)横浜市消費者協会理事長、NPO法人 消費者スマイル基金理事長。

萩原 なつ子（はぎわら なつこ）

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科委員長・教授。
（公財）トヨタ財団アソシエイト・プログラム・オフィサー、宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学環境情報学部助教授を経て現職。認定NPO法人日本NPOセンター副代表理事。専門分野は環境社会学、非営利活動論、ジェンダー論。

—— 対立から提案・対話型へ ～消費者団体と企業～

萩原／雪印メグミルクの社外取締役に就任されたきっかけを教えていただけますか。

阿南／私の前の社外取締役は日和佐信子さんという方ですが、その方が全国消費者団体連絡会で活動していた時に雪印乳業の事件（雪印乳業食中毒事件・2000年6月、雪印食品牛肉偽装事件・2002年1月）が起こりました。不祥事によって雪印乳業は破滅の危機に陥りました（実際に雪印食品は解散になりました）。この時に雪印乳業の再生をかけた強力な招請を受けて日和佐さんが社外取締役に就任されました。そして、社外の視点を取り入れた経営を進めるため、社外委員を半数以上とする企業倫理委員会を設置し、消費者重視経営をはじめとするさまざまな取組みを推進してこられました。私は、同じ生協で消費者活動をしていましたし、全国消費者団体連絡会では日和佐さんの次々代の事務局長でしたので、その繋がりがあって社外取締役を引き継いだというわけです。

私は生協で長年にわたり消費者活動をしてきましたが、最初の頃は、日本において消費者運動が生まれたころの「不良品追放運動」のような「対立型」の活動が主だったように思います。でも、年月を経るなかで、企業自身も変わってきましたし、あるところから、消費者活動も対立型ではなくて、提案・対話型へと変わってきました。消費者の利益を守るために、企業にはこうあって欲しいとか、こんな社会制度が必要ではないかということを提案し、企業や行政とも話しあうようになってきたわけです。つまり、意見は対立するのだけれども、お互いが尊重しあって、聞きあい、話しあう中で解決策を見出していくという成熟した民主主義社会への転換が起こっているように思います。

そしてこれからの時代の消費者団体には、さまざまな問題点を指摘し、企業等と積極的に対話し、改善を促していくという新たな役割の発揮が求められていると思います。

萩原／企業はもとを辿っていけば、誰かの為に、誰かが幸せになる為にというところから始まっていますよね。

阿南／確かにそうですね。企業には必ず創業の精神と理念があります。

旧雪印乳業の創業の精神に「健土健民」という言葉があります。健やかな土地に健やかな民族があるという意味で、1925年に雪印乳業の前身である北海道製酪販売組合を創設した黒澤酉蔵翁の言葉です。現在の雪印メグミルクはこれをベースに、「『消費者重視経営の実践』『酪農生産への貢献』『乳（ミルク）にこだわる』の3つの使命を果たすことで社会へ貢献する企業であり続ける」ということを基本理念にしています。

—— 社外取締役としての役割

萩原／雪印メグミルクでのお仕事の内容を教えて下さい。

阿南／社外取締役の役割はその会社の経営を“社外の眼”から監

視監督することですから、取締役会で発言するのが仕事です。雪印メグミルクの場合、旧雪印乳業グループの過去の不祥事の総括において、理念に反した「消費者不在」の内向きの企業体質に問題があったとされ、それを克服するために消費者分野からの出身者を社外取締役に置くこととなり、雪印メグミルクとなってからもこれが継承されています。

私は社外取締役であると同時に「企業倫理委員会」の委員長の役割も担っていて、社外の有識者と一緒に、全国の工場の品質監査に出向いたり、商品の表示チェックをしたり、定期的に消費者団体のみなさま方からご意見をいただいたりという活動もしています。取締役会においては、「企業倫理委員会」の報告を行うなかで外部の意見や、工場監査の際の意見交換で出された現場の従業員の声などを伝えています。そして、“これはおかしい”と思うこと、“もっとこうした方がいい”と思うこと、疑問に思うことなどを率直に発言しています。

ですが、「企業体質」を変革するというのは大変なことですね。経営トップと現場の距離を縮め、かつ風通しを良くして、横の連携や情報共有をしっかりとやる、一人一人の従業員が思い切り力を発揮する、地域とのコミュニケーションを図り、地域に貢献する……たくさんの具体的な課題を一つ一つていねいに実行して“体質化”していく以外に道はないのです。そして何よりも、社会に貢献する企業であり続けるという創業の精神と理念を絶対に忘れないことですね。それに私は唯一の女性取締役ですから、ダイバーシティの観点からもしっかりと発言していかなければならないと思っています。

—— 社会人×大学生、学びの効果

萩原／21世紀社会デザイン研究科と学生に期待することは何でしょうか？

阿南／研究科に入学する学生は、生涯、社会とのかかわりを持ち、役に立ちたいと思っているのだと思います。研究科は、その志を実現し成し遂げる方法を学び、考え、見つける場所になっているのですよね。企業やさまざまな組織で働いている人の場合は、その企業や組織の理念の実現のための仕事を通してより良い自己実現の方法を学ぶのでしょうし、企業や組織を離れた人の場合は、地域で自己実現していく新たな道を学ぶのだと思います。

このように、いくつになっても学びたい時に学べる場はなかなかありませんね。雪印メグミルクの社員にも大学院に入学を勧めてみようかと思っているくらいです。

萩原／つまり、21世紀社会デザイン研究科で学ぶということは、その人自身にとっても貴重な経験になるけれども、結果として企業または組織を変革していく力、ひいては社会を変革する力をつけることにも繋がるということですね。

阿南／その通りだと思います。

—— 大学における消費者教育の必要性

萩原／大学における消費者教育は必要だと思うのですが、いかがでしょうか？

阿南／同感です。消費者庁の2016年度消費者白書には、「トラブルにあわないように参考にする情報」を何から得ているかということについての調査結果が掲載されていますが、若い人達は、圧倒的にインターネットでしたが、年代が進むにつれ減少し、高齢者になりますと、テレビが一番で、その次が、家族・友人・知人からのアナログ情報でした。また「学校の授業から情報を得ている」は15歳から19歳までではかなり高い水準にあったものが、20歳代以降になりますと激減しています。つまり大学の授業はほとんど情報源になっていないということです。実際に大学として消費者教育をやっているところは本当に少ないです。インターネットなど他の手段を使っているのだからいいじゃないかという意見もありますが、しかし保護者のもとを離れて一人暮らしを始める学生の場合は特に、入学した途端に様々な消費者契約を行う機会は増えますから、トラブルにあうリスクは高まります。それにトラブルにあわないというだけでなく、「消費者教育の推進に関する法律」の目的として明記されている「消費者の自立支援」と「消費者市民社会の形成への理解促進」という観点からも、大学における消費者教育はとても重要です。環境の視点や、倫理的視点でモノやサービスを選び、使っていく、また就職先あるいは投資先を選ぶという消費者行動で社会をよくすることができることを大学においてこそ学んでもらいたいです。

萩原／市民社会の担い手を育成する教育の場として大学が重要だということですね。たとえば雪印メグミルクと、21世紀社会デザイン研究科がコラボして、消費者教育をしっかり学べるような環境を作りたいですね。夏休みに一週間、消費者教育の講座を開設するとか……。いかがでしょう？ 何かそういう場を創っていただくと大変ありがたいです。

阿南／確かにそうですね。雪印メグミルクは、食育活動にはすごく力を入れています。全国に17の工場がありますが、その多くが工場見学を受け入れています。また、全国で「牛乳・乳製品料理講習会」や、「骨・カルシウムセミナー」などの講習会、小中学校への「出前授業」を行ったりしています。

萩原／雪印メグミルクの取り組みや、なぜ阿南さんが社外取締役として雪印メグミルクにいらっしゃるのかについて、つまりよそ者の目、第三者の目、阿南さんのような存在自体が、組織の健全化とか、危機管理、マネジメントにおいて重要だということを語って頂けるとありがたいです。

阿南／そう言って貰えると嬉しいです。ぜひそのような発言を心掛けたいと思います。

萩原／阿南さんがアドバイザリーボードにいらっしゃることが、21世紀社会デザイン研究科にとってとても刺激になります。本日はどうもありがとうございました。

番外編 消費者教育の現場 ～活動の紹介～

横浜市消費生活総合センターによる啓発イベント

2018年3月2日、新都市プラザ（横浜駅東口）にて、市内の消費者団体や消費生活推進員と協働し、消費者被害の未然防止と消費者市民社会の実現を目指す、“街頭キャンペーン”を行いました。テーマは「防ごう！みんなで 消費者被害」。

「子どもを事故から守るプロジェクト」のテーマソングとダンスを阿南さん自ら披露されました。

王 薇 さん
（オウ ビ）

中国北京出身であり、留学生として来日しました。現在は法務事務所の事務局長として、在留資格関連手続をはじめとするイミグレーションの仕事をしています。趣味は旅行と歌うこと。博士課程前期1年、長ゼミ所属。

新たなキャリアを目指して！

現在、在留資格関連申請手続等の移民法務を専門とする行政書士法人KIS近藤法務事務所（本部:豊島区池袋）に勤務していることから、研究テーマを「移民研究」としています。特に「投資移民」（永住権を前提として自らの資産を投資すること）に関心があります。なぜなら、「投資移民」の「機能」として、単に「投資」という前向きなものだけでなく、中国返還前の香港からカナダへの「投資移民」のように実質的な「難民」として活用されることもあるなど、非常に幅広い「機能」を担っているからです。この点では、現在、日本においては「投資移民」制度は導入されておらず、類似した在留資格としては「経営・管理」（会社経営等を目的としたもの）があります。しかしながら、「経営」の本質は「意思決定」であります。そして、例えば不動産投資のように売買、賃貸、管理等の意思決定が重要な業態なら、在留資格「経営・管理」の運用次第で現行在留資格制度の下でも「投資移民」と同様の状況を成立させることができる側面があります。もっとも、このような視点は、先行研究も少ないことから、文献研究や量的調査よりも質的調査（インタビュー調査、参与観察等）が中心となると考えます。

さらに、カナダやオーストラリア等、海外の「投資移民」の事例との比較も重要であり、それらの中には多種多様な背景をもった中国人もいるでしょう。
本研究の成果を広く社会に、そして実務に還元できるように頑張りたいと思っています。是非とも、長有紀枝先生をはじめ21世紀社会デザイン研究科の先生方のご指導を賜りながら研究を完成させ、自らのキャリアアップにつなげたいと思います。

そして、入学してしばらく経ち授業にも慣れてきた今、私は、この前期課程の2年間というのは長いようで短い、と改めて感じています。だからこそ、日々の授業や研究過程を大切にして頑張っていきたいと思います。
これからもご指導よろしくお願いいたします。

小林 航大 さん
（こばやし こうだい）

1995年生まれ。本学現代心理学部心理学科卒業。大学1年の冬より1年間ガーナ共和国でボランティア活動に参加。その経験から、ガーナ、広くはアフリカにおける地域社会の仕組みや産業、宗教、文化に興味を持ち、本研究科に進学。博士課程前期1年、村尾ゼミ所属。

経験を学びに、学びを行動に

「チョコレートってどんな味?」その言葉が当時の私を動かした。チョコレートを作っている本人たちがその味を知らない。小学6年生、中学1年生の私にとって、テレビに映るガーナのカカオ農園の子供たちが発したその言葉は、衝撃そのものであった。「いつかアフリカに行きたい」、「ガーナで何かをしたい」。10代の私が抱いた漠然な想いが大学2年で形になった。

ドイツに本部を置く国際NPO:ICYEのボランティアプログラムでガーナに渡航。アシャンティ州の孤児院で子供たちへの教育ボランティアを行うというものであった。「よし、やってやる。俺ならできる。」中高6年間全国制覇を目指し続けたハンドボール少年のままの私は、自信過剰であった。しかし、私は打ちのめされた。地球の反対側の太陽が降り注ぐ大地で待っていたのは、私の想像をはるかに超えるものであった。大きく凹んだコンクリートの道、生き生きとした人々、魂を揺さぶる音楽、カラフルな民族衣装、窓もドアもない教室、輝く子供たちの瞳、宙に漂う赤土の匂い、そしてただ立ちすくむ自分。悲しみも喜びも、貧しさも豊かさも、伝統も革新も、自信も無力さも、全てを超えた「無知」という経験がそこにはあったのだ。

「私は何も知らない。」「もっとガーナを、この人たちを知りたい。」「そして、もっとこの人たちと関わっていきたい。」 帰国した私の心の中は、ガーナを、アフリカを、あらゆることを学び、動きたいという気持ちで埋め尽くされていた。そして、そんな気持ちでたまたま目にした「アフリカから考える社会デザイン」というオープンゼミに参加したことが、本研究科への扉を開くことに繋がった。圧倒的な知識不足が、ガーナという経験を通して知的好奇心・行動欲求に変換され、新たな道を開かせてくれた。

現在、ガーナの首長制社会や地域社会の産業をテーマとした研究を行う予定である。そして、将来はNGOやNPOなどでガーナの地域社会に関わった仕事を通して世の中に貢献していきたい。ガーナの子供を目にした私・ガーナに滞在した私が、現在勉強と研究に熱中できる私を作り上げた。そして、今、私はガーナと関わるキャリアを築く2年後の私を描きたい。

井上 温子 さん
（いのうえ あつこ）

NPO法人代表・板橋区議会議員(無所属)。大学3年次のゼミ活動で、地域活性化プロジェクトに参加。卒業後は職員として、学生ボランティアの調整やコミュニティカフェ運営を担当。その後、議員とNPO活動を行っている。博士課程前期2年、亀井ゼミ所属。

理想の社会を目指して

「地域の交流拠点を小学校区に」という、一大政策を掲げて2011年に区議会議員に初当選。2013年には、NPO法人にて、居場所のイメージを具現化。「地域リビング プラスワン」を開設し、地域の50人のボランティアさんたちと運営してきました。政策提案と実践をしてきましたが、たくさんの壁にぶつかりました。この先へ一歩進むために、もっと学びたい、もっと情報が欲しいと考え、大学院への入学を決意しました。

現在は、働きながら週に3～4日大学院に通っています。必要な単位については、ほとんど1年次でとれましたが、「魅力的な授業がたくさんありすぎて……」という理由で授業を受けています。社会人になってからの学びは、すぐに現場で活かせるのが素敵な点です。

修士論文に関しては、私のライフワークでもある「居場所」について書いています。一人暮らしの高齢者の孤立防止や、子どもの貧困等の課題解決、障がい者の就労支援など、居場所に求められる役割は増大していると考えています。

一例として、小学生の放課後について。最近では、犯罪に巻き込まれる恐れから、「一人で外を歩かないように」とか、「小学生の放課後の居場所は学校」といったように、安全に、安全にと、社会の仕組みが作られていっています。子どもたちの命を守ろうとする想いから生まれた当然の流れではあります。しかし、「子どもたちが、自由に、街のなかで、遊ぶ場を選択して、地域の大人との信頼関係を築ける社会にするためにはどうしたら良いのか」といった問いは、持ち続けなければならないと思います。街から子どもたちの姿がどんどん見えなくなっていったら、信頼できる大人がもっといなかったら、より危険になるかもしれません。また、子どもたちが、自主的に場を選択して遊べる環境は、どれだけ豊かでしょうか。

根本的課題解決は、地域のつながりを再度生み出すこと。同じように高齢者や障がい者、若者、外国人にも、多様な地域課題があり、それらを解決の方向へと進め、「理想の社会」を実現する手法として、多世代が交流する居場所を広げようと研究しています。学生それぞれに「理想の社会」があり、それを研究・実践できるのが、21世紀社会デザイン研究科の面白いところです。学生同士、一緒に新たな取り組みを企画・実践することもあり、学内だけで終わらない、志を共にできる人と出会えたことは何よりも貴重です。

水中 好隆 さん
（みずなか よしたか）

1975年立教大学社会学部社会学科卒業、建設会社に入社し主に海外事業に従事、関連会社ゴルフ場支配人を経て、公益財団法人で助成事業に関わる。「天に唾すると落ちてきて自分に当たる」を心がけて過ごしている。博士課程前期2年、萩原ゼミ所属。

正解のない問題を考える

21世紀社会デザイン研究科に入学して1年が過ぎ、修士論文作成のプレッシャーがじわじわと押し寄せてきています。私が研究科に入学しようと思ったきっかけは、中学入学から大学卒業までの11年間（普通は10年間）を立教学院で過ごしたことが大きいと思います。過去を振り返るとなんでも美しく見えると言いますが、青春を「自由の学府」で過ごせたことが、私の基礎となっています。

研究テーマは「芸術助成財団における助成プログラムの評価の可能性と意義」です。なんかこの頃、評価できないと駄目、効果が出ないと駄目、すぐに結果や効果を求める風潮が強くなったように感じます。でも、もっと長いスパンで物事を考えても良いと思いませんか。確かに会社の業績とか、期間実績は短期で測る必要があるかもしれませんが、人間の生き方とか芸術文化とか、長いスパンで見ないとわからない事柄もたくさんあると思います。多様な評価軸で物事を測ることで、真実が見えてくるのではないかというのが私の仮説です。

私の人生の大半を占めた会社生活では、もぐら叩きのように問題が起きると対策を打つ、問題が起きないように対策を打つことが求められてきました。問題解決型の思考に慣れた私にとって、正解がない問題を一所懸命考えることが求められる大熊先生の一連の哲学の講義はとても新鮮で魅力的です。大学院で学んで良かったと感じる時間です。

最後に、東京には国公立、私立の美術館博物館が多くあり、魅力的な展覧会が開催されています。国宝級の絵画や仏像、海外の名品も多く展示されています。学割になる上、立教学院提携割も利用できる美術館博物館もあります。多種多様な名品を見ることで人生を豊かなものにすることができると思います。修士論文に行き詰まった際に、ぜひ皆さんも見に行って心のバランスを取ってください。

柳谷 典子 さん
（やなぎたに のりこ）

1975年大阪生まれ。化学系メーカーで役員秘書を務めた後、同社で女性だけのBtoC新規プロジェクトを立ち上げ、現在は主に広報や顧客接点創造などを中心に東京地区での活動全般に携わっています。博士課程前期2年、梅本ゼミ所属。

「モヤモヤ」が導いてくれた大切な場所

「モヤモヤする」。今思い返すと、自分でよくわからないこの感情について「言葉」を探そうとしていたのだと思います。きっかけは2年前、そんな何とも言えない感情を抱える中で目に止まった日経との共催「ソーシャル・デザイン夏期集中講座」です。クラス担任だった中村先生との出会いや、この研究科にいらっしゃる多彩な教授陣の講義に触れ、これからの「社会」ということを、自分事として捉え、自分事としてアウトプットしていくことにつながる新しい学びについて好奇心がムクムクと湧き起こりました。現在携わっている仕事を通して、地域と人をつなぐプロジェクトを行っていることもあり、肩肘を張らない、持続可能な企業と社会の関わり方についての興味を深掘りしてみたいと、この研究科に飛び込みました。

入学してみると、新しい学びと刺激のシャワーに、いかに自分が小さい枠に固執し、ちっぽけな考えに縛られて過ごしていたかを痛感させられることばかりでした。そうして過ごすうちに、自身の「モヤモヤ」は自分だけではなく同年代の女性たちが感じているのではないかとの気付きを得たのです。企業と社会との関係性についての興味はもちろん持ち続けていますが、今はその企業の中にいる「人」、特にロストジェネレーション世代女性特有の生き方・働き方にフォーカスし、「モヤモヤ」に言葉を与え、捉えることを研究テーマとしています。

入学前は仕事との両立について、果たしてマネジメントできるか不安もありましたが、1年次はただひたすら学びなおすことや新しい世界に「楽しい!」時間を過ごしました。そして2年次を迎えた今、「大変!」な時間になりそうな予感がしていますが、同級生の皆さんに支えられ、励まし合いながらゆっくりですが歩みを進めています。そしていつかその大変さを「楽しかった!」と思い返すことができるよう、大切にこの時間を過ごしたいと思っています。

山崎 宇充 さん
（やまざき うじゅう）

1967年東京生まれ。IT、メディア上場企業の役員歴任後40歳で独立。IPO支援、新規事業開発、企業再生などを手掛ける一方で地方創生案件に関わる。現在、3社の代表取締役他、地域ブランディング協会顧問、地域イノベーション財団代表理事、三重県志摩市食の創生委員などの任に就く。博士課程前期2年、中村ゼミ所属。

学ぶ喜びを感じる日々

一昨年の元旦“来年50歳で何がしたい”と自問自答すると、頭に浮かぶのは“大学に行きたい”だった。家庭の事情もあり高校卒業後は学費を貯めるために働いた。3年後お金が貯まり大学を受験し合格するも母親の手術費、入院費などで進学を断念、残ったお金でプログラミングを学びIT企業へ入社。

人生は不思議なもので一生懸命働いたらトランスコスモス（株）で32歳の時に常務取締役となり部下2500人を率い、その後34歳でスカイパーフェクトコミュニケーションズ（現スカパー Jサット）の新規事業役員となった。

当時は、大学なんか行かなくても東証1部上場会社の役員として結果を出した自分に酔っていて、“学ぶ”“勉強”“大学”なんて机上、世の中のド真ん中で実践し仕事をすれば知識は身につく!!　そんな想いがあった。

大学院に行こうかと思っている、と友人に相談すると、“もう学ぶことないんじゃない?”と笑われ、今でも忙しいのに通えるの?　と心配される。

確かに、週2日の出張に毎晩会食、土日は少年野球を教えているから空いた時間などないが、思い切って全てのスケジュールを白紙にして調整し、昨年春から50歳の挑戦がスタートした。20数年間体験してきたビジネス分野ではなく、社会課題と向き合う21世紀社会デザイン研究科を選んだ。平日18時には打ち合わせを切り上げ大学へ、土曜日は昼12時に少年野球の練習を切り上げ大学へ。週4日大学に通う事は簡単ではなかったが、充実した1年を過ごすことができた。とにかく楽しくて仕方がないのだ。講義を聴いて理解できていると自覚するものもあれば、全くわからないという講義もある。わからないと悔しくて、いろいろ調べてみるのだが、そこでまた理解できた、理解できなかったという分岐点に辿り着く、そして更に調べ始める。気がつくと朝となり仕事に向かう、空いた時間また調べ始める。こんな夢中になることは久しぶりだ。心理学者であるMihaly Csikszentmihalyi（ミハイ・チクセントミハイ）が提唱したフローの概念さながらに 時間を忘れて今を楽しんでいる。

人生があと何年続くかわからないが、自分で決めた人生の折り返し地点は、この立教大学大学院にある。修士論文を書き終えた時、自分で新たな人生の扉をこじ開けているに違いない。今、学ぶ喜びを噛み締めながら、来年の修士論文完成に向け頑張っていきたい。

宮本 聖二 特任教授
（みやもと せいじ）

早稲田大学法学部卒業後、NHK 入社。鹿児島、沖縄、北九州放送局、報道局で報道番組やドキュメンタリーを制作。民間商社に出向して映像コンテンツの海外販売に当たり、NHK 復職後、海外ドラマやBS 世界のドキュメンタリーを担当。「戦争証言プロジェクト」、「東日本大震災証言プロジェクト」の編集責任をつとめた。2015年から Yahoo! ニュースでネット向けの映像コンテンツ開発とコンテンツの品質管理に当たる。デジタルアーカイブ学会学会誌編集委員、評議員。

映像コンテンツを社会デザインに生かす

2016年から兼任講師として、社会課題を映像コンテンツ化する演習を担当してきました。この4月からはこの映像コンテンツ制作に加えてメディア論やデジタルアーカイブ論などを担当します。メディアや映像の力を課題解決のために、より良い社会の実現のために活用することを皆さんと追求したいと思っています。私は、30年以上にわたってNHKで報道の仕事をしてきました。社会課題を見つけてニュースや番組にして来ましたが、常に問題提起にとどまっていたような気がしています。この研究科では、ぜひ皆さんと問題提起だけにとどめず、解決のための関係者の結びつけ、視聴と議論の場の構築までをともに考えていければと思っています。

分断ではなく、共生と共有に向けて

Yahoo!ニュースというプラットフォームで、インターネット時代の映像コンテンツ制作や様々なパブリッシャー（媒体社：新聞、テレビ、出版社）から入稿してくる記事やコンテンツをどのように見せるのか、それら記事の質をどう担保するのかということに取り組んでいます。その仕事を進める中で、メディアをめぐる大きな変化を感じています。伝統メディアであるテレビ・新聞・雑誌の視聴者、読者が減り、ニュースや情報を取得するデバイスはPC、タブレット、スマホに、プラットフォームはネット、アプリ、SNSにシフトしています。そのことは何を意味しているのでしょうか？　テレビ局や新聞社などが手間と人とお金をかけて作った記事、コンテンツが、ネット上のコンテンツを切り貼りしたり、取材や調査をしないまま勝手な思い込みで作られたりしたコンテンツとの区別がなくっている、つまり、ユーザーにとってみればどれもフラットに受け取られてしまうような時代になっているということです。真偽不明、フェイク、ヘイトを撒き散らすコンテンツが、受け取る人によっては真実のようにあるいは好ましく見える、そんな時代が来ています。この状況を、私は社会の分断を深めたり、人々の間に溝を生むリスクだと受け止めています。私たちの社会が解決の難しい様々な課題を抱えているときに、こうした分断や溝はその解決への動きをさらに遠ざけてしまいます。しかも、去年から今年にかけて上述したようなコンテンツや記事が伝統メディアからも発信されるようになり大きなショックを受けました。沖縄の反基地運動を事実の裏付けなしに侮蔑的な内容で伝えた東京MXの昨年1月放送の「ニュース女子」、同じく自らの誤報をもとに沖縄の地元新聞を「報道機関を名乗る資格はない、日本人の恥だ」とまで断じた産経新聞の記事です。新興のネットメディアやSNSではない伝統メディアまでがこうした分断を深めるような言説を振りまいたことに大きな危機感を抱きます。

私たちが考えるメディアのありよう

では、私たちはどうすれば良いのでしょうか。こうした今のメディアのありようを私たちの側からより良くしていくことはできないでしょうか。かつてNHKにいた時の私は、取材者・制作者としてどこか独りよがりではなかったろうかと考えています。他の大手メディアもそうかもしれません。ユーザーとしての視聴者との関係を親密に取り結んでいただろうかと。読者や視聴者におもねる記事やコンテンツを出せば良いということではありません。もっと、人々の中に分け入ってコミュニケーションを取りながら、読者や視聴者が何を望み、何に課題感を持っていたのかをきめ細かく掴み取って、報道に、番組に生かしてきただろうか。その結果、いまやそれぞれのメディアとユーザー（読者や視聴者）の間にこれまでにない隙間が広がっているように思えてならないのです。

社会デザインの手法でより良い社会の構築を目指す私たちこそ、メディアとの関係の取り方、活用の手法について問題提起をする必要があると思います。このテーマで、皆さんと議論をしたいと思っています。

2018年4月7日(土)開催

21世紀社会デザイン研究科入学式
～自分の可能性を信じ、学びを深める～

2018年4月7日(土)、立教学院諸聖徒礼拝堂(チャペル)にて、入学式が行われ、本研究科に前期課程(修士)39名、後期課程(博士)2名、計41名が入学しました。

式典では、郭　洋春(カク・ヤンチュン)総長が祝辞を述べ、小説家であり天台宗の尼僧である瀬戸内寂聴氏の「生きるということは、死ぬ日まで自分の可能性をあきらめず、与えられた才能や日々の仕事に努力しつづけることです」という言葉を紹介し、「自らの可能性を信じ努力し続ける姿勢こそ、立教大学で学ぶすべての学生に堅持してほしい姿勢です」と新入生にエールを贈りました。

同日、池袋キャンパス内のカフェテリア山小屋にて、夕食を兼ねた新入生歓迎会が行われました。最初は不安と期待の入り混じった表情だった新入生。教員との会話で少しずつ緊張がほぐれた様子で、和やかな会となりました。

立教大学は今年創立144年を迎えます。また池袋キャンパス100周年という記念すべき年でもあります。この記念すべき年に入学された皆さん、入学おめでとうございます！

2018年3月3日(土)開催

立教×ベネッセコーポレーション共同講座
「ママtomoパパtomoカレッジ」
2018年春 育休復帰準備1DAY講座

主催　21世紀社会デザイン研究科、社会デザイン研究所
共催　株式会社ベネッセコーポレーション
講師　萩原 なつ子(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授・社会学部教授)／大熊 玄(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科准教授・文学部准教授)／亀井 善太郎(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任教授、PHP総研主席研究員)／白土 謙二氏(電通特命顧問 クリエイティブ・ディレクター)／小崎恭弘氏(大阪教育大学准教授、NPO法人ファザリングジャパン理事)／三木 智有氏(NPO法人tadaima!代表・家事シェア研究家)

去る3月3日(土)、立教大学池袋キャンパス14号館にて「ママtomoパパtomoカレッジ2018年春 育休復帰準備1Day講座」を開講しました。復帰を目前にした育休中のワーキングマザーとそのパートナーに向けに、夫婦で協力し合って子育てとキャリアを両立していくための実践的な学びの機会の提供を目的とした講座です。

立教大学での開催が4回目となる今回は、ママのみ20名、ママ・パパ41組が参加し、赤ちゃん連れの参加者をお助けする大学生ボランティアも活躍。立教大学の講師陣による「哲学者の家族論」や「セルフブランディング」「パパ100人会議」等、ワークショップを含む講座を実施し、大盛況の1日となりました。

2018年3月24日（土）開催

想像力のスイッチをどう起動させるか？
～「ポスト真実」の情報環境下におけるシティズンシップ教育を考える～

主催 21世紀社会デザイン研究科、社会デザイン研究所
共催 日本シティズンシップ教育フォーラム
講師 下村 健一氏（情報スタビライザー、News23元キャスター、白鴎大学客員教授）／岡田 泰孝氏（お茶の水女子大学附属小学校教諭）／伊藤 久仁子氏（共立女子第二中学校高等学校教諭）／亀井 善太郎（立教大学21世紀社会デザイン研究科教授）

「18歳選挙権」の実現や新科目「公共」の設置、道徳教育の義務化、地方創生の実現に向けた学校地域協働の推進や地域問題解決学習の広がりなどを受けて、シティズンシップ教育への関心は高まっている。

今回は「ポスト真実」ともいわれる情報環境下でのシティズンシップ教育のありようについて「想像力のスイッチをどう起動させるか？」という問題意識から接近することとした。市民が政治に参加したり、社会活動を展開したりしていく際、その判断や意思決定には情報の入手と吟味、そして、それを踏まえた発信を行なっていくこととなる。しかし、情報との付き合い方を誤れば、自分に都合のいい情報に囲まれて、視野の奥行きも広がりも欠いて視点が偏ってしまったり、不完全な情報に踊らされてしまったりする可能性がある。こうした陥穽に嵌らず、想像力豊かな市民が育つにはどうすれば良いか。

メディア・リテラシーや哲学的思考力を涵養していく独創的な教育実践を手がかりに、会場全体で議論を深める良い機会となった。

2018年4月26日（木）19:00～21:30開催

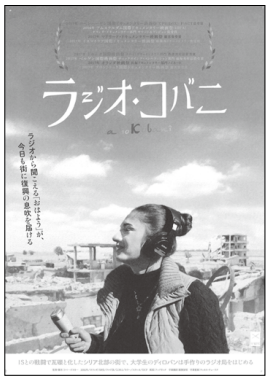
公開シンポジウム
ドキュメンタリー映画「ラジオ・コバニ」上映を通じて考えるシリアの再生

場所 立教大学池袋キャンパス11号館AB01教室
主催 21世紀社会デザイン研究科、社会学部、社会デザイン研究所
共催 有限会社アップリンク
協力 特定非営利活動法人　難民を助ける会（AAR Japan）

新学期開始後間もない4月26日、「ドキュメンタリー映画「ラジオ・コバニ」上映を通じて考えるシリアの再生」を開催した。奇しくも米英仏によるシリア空爆が行われて約2週間。シリアに対する関心の高まりからか、学内外から会場の大教室がほぼ満席となる300人が参加した。

本作は、オランダ在住のクルド人監督による2016年の作品でISに破壊されたシリア北部の街コバニを舞台に、その再生を3年というスパンで追った69分のドキュメンタリー。破壊された故郷に戻り，自らラジオ局を立ち上げたアレッポ大学の20歳の学生ディロバンを主人公に彼女が取材を通じ、紛争の痛ましさともに、町の再生を伝える様を描く。

作品上映とドスキー監督によるメッセージを視聴後、本研究科長有紀枝教授の司会進行のもとパネルディスカッションが行われた。東京外国語大学アジア・アフリカ研究所黒木英充教授からは映画の背景となったシリアの政治・社会情勢、文化的側面からみた解題含め、内戦の本質など地域研究者ならではの解説が行われた。ついで難民を助ける会職員で日本在住のシリア人ラガド・アドリーさんから映画の感想とともに紛争の状況、内戦前のシリアについて語られた。当日は、日本で学ぶコバニ出身の留学生も参加、本学や他大学の学生、社会人含め多くの質問やコメントが寄せられ、活発な質疑応答が行われた。映像が伝える苛酷さと対照的に、全編がディロバンの「未来のわが子への手紙」として語られたことから言葉の美しさについて言及した参加者も多かった。すぐに解決には至らないが、遠く離れた日本とシリアをつなぐ一助となる講演会となった。



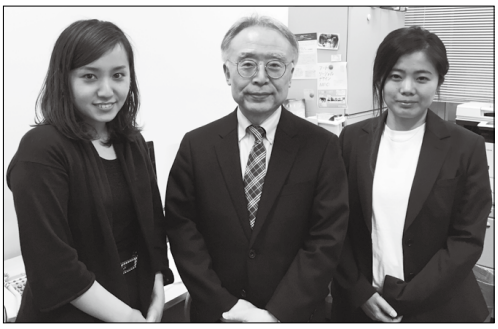
平成30年度　文化庁　大学における文化芸術推進事業

2020年文化プログラムの実現を意識した、地方都市における、文化芸術による「まちづくり」「国際交流」を推進する人材育成事業

東日本国際大学と九州大谷短期大学と連携し、地方都市における「国際交流」「まちづくり」「アーティスト・イン・レジデンス」をキーワードに、コミュニティの再生と創造、国際交流の推進を担う地域に根付いたアートマネジメント人材の養成に取り組みます。

1年目は各大学で夏に2日間の集中講座を開催します。秋にはフィールドワークを実施し、冬には各大学の特色を活かした内容の成果発表も予定しております。大学の持つ特色を活かし、互いに不足する部分を補うことで、2020年文化プログラムのレガシーとして、それ以降もそれぞれが核となって事業と人材の継続的育成を持続的に実施できるように目指します。

また、本事業では、より現場に即した課題の共有と解決のための定例研究会も行っております。詳細は社会デザイン研究所までお問合せください。



社会デザイン研究所長／中村陽一（中央）

問合せ先
立教大学社会デザイン研究所　担当：森田、崎田
Tel：03-3985-4893　Fax：03-3985-4725
Mail：hall-koza@rikkyo.ac.jp
HP：http://www2.rikkyo.ac.jp/web/social-design/

集中講座

2018年 〈平日開講：基礎コース〉 Aクラス（水曜開講） 7/18（水）～9/5（水） Bクラス（木曜開講） 7/19（木）～9/6（木） 19:00～21:30 〈土曜開講：アドバンスコース〉 7/28（土）～9/8（土） 14:00～17:00	**◆21世紀社会デザイン研究科×日経ビジネススクールPresents「ソーシャルデザイン集中講座 2018」** 会場／立教大学池袋キャンパス 定員／各クラス50名程度 受講料／43,200円（税込） 詳細・申込み先／ソーシャルデザイン集中講座事務局 TEL.03-6812-8692（9:30～17:30、土・日・祝日は除く） URL／http://ripple.xsrv.jp/demo/mbark2018/html03/pc.html ・各クラスともに4回以上出席された方には立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科から修了証が発行されます。 ・3クラス合同・終了懇親会（ネットワーキングパーティー）を9月8日（土）に行います。

2018年度　進学相談会

2018年 第2回　6月23日（土） 第3回　9月22日（土） 第4回　10月27日（土） 13:30～16:30	**◆2018年度　進学相談会** 会場／立教大学池袋キャンパス内 太刀川記念館 対象／21世紀社会デザイン研究科に興味をお持ちの方 内容／修了生によるプレゼンテーション、個別相談会ほか 参加費／無料 申込／不要 問合せ先／21世紀社会デザイン研究科委員長室 TEL.03-3985-2181（月～木）11:00～18:00 第1回 進学相談会の様子

ベネッセ共同講座

2019年 3月2日（土）※予定	**◆立教大学×㈱ベネッセコーポレーション共同講座「ママtomoパパtomoカレッジ」1Day講座** 育休中のママ、パパの仕事復帰を応援する1DAY講座の開催を予定しています。

発　行／
立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集長／萩原 なつ子
編集支援／木戸 さやか
発行日／2018年6月29日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

21世紀社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報をホームページでお知らせしております。

21世紀社会デザイン研究科ホームページ
http://www.rikkyo.ac.jp/sindaigakuin/sd/index.html

21世紀社会デザイン研究科Facebook
https://www.facebook.com/21csd/

デザイン：㈱ペンシルロケット